

# Film Festa

ねりまフォーラム2024 男女共同参画の集い



## グリーンブック

行こうぜ、相棒。  
あんたにしかできないことがある。

令和6年11月16日（土）練馬区立生涯学習センター

主催 練馬区 / 企画・運営 ねりまフォーラム実行委員会

ご来場いただき誠にありがとうございます。

ねりまフォーラムは、男女共同参画社会について考えていただく機会として、公募区民等で構成する「ねりまフォーラム実行委員会」が企画・運営を行い開催しています。

今年度は、「多様性の受容と人権の尊重」をテーマに映画上映会を企画しました。

人には性別、国籍、人種、障がいの有無や性的指向など、それぞれが持つ多種多様なバックグラウンドがありますが、一人ひとりの考え方や生き方に優劣はありません。

それぞれが尊重され「自分らしく」生きられる社会というのは、すべての人にとって豊かな社会、幸福な社会なのではないでしょうか。

誰もが生きやすい人権尊重の社会を実現する第一歩になるよう、この上映会が自分や周りの多様性に気づき、認め合うきっかけとなれば幸いです。

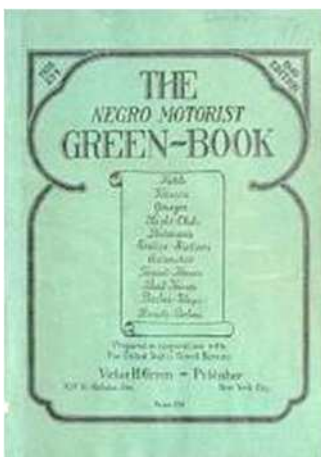
(ねりまフォーラム実行委員会)

## ～ STORY ～

ニューヨークの一流ナイトクラブで用心棒をしていた、トニー・バレロンガ(愛称:トニー)は、ナイトクラブの改装に伴い失業し、新しい仕事を探していた。その時に舞い込んできたのが黒人ピアニスト、ドクター・ドン・シャーリー(愛称:ドク)の運転手としてアメリカ南部へのコンサートツアーに同行するという仕事だった。1960年代当時のアメリカ南部は、黒人への差別意識が色濃く残っていた。何故そんな地域にわざわざ出向きコンサートをするのか、トニーにはさっぱりわからない。がさつで無学、でも心優しいトニー。カーネギーホールの上に自宅を構える博学の天才ピアニストドクター・シャーリー。人種も考え方も全く違うふたりは、果たして無事にコンサートツアーを乗り切ることができるのだろうか？

この映画は、トニーの実の息子のニック・バレロンガが、生涯続いた二人の友情の始まりの物語を書くために製作と共同脚本を務めました。実際のトニーは、シャーリーと約1年間(映画では8週間)のコンサートツアーを共にし、それまで抱いていた黒人への偏見がすっかり変わり、息子たちにも「人はみな同じだ」と伝えるようになった、というエピソードがあります。

## ～ グリーンブックとは？ The Negro Motorist Green Book ～



ニューヨーク州ハーレム出身の郵便配達員ビクター・ヒューゴ・グリーンは1936年、黒人が自由で平等な旅行ができるようにと願って「The Negro Motorist Green Book(黒人の自動車旅行者のためのグリーンブック)」を出版した。黒人の旅行者のバイブルとも言うべきこのグリーンブックは、黒人が安全に利用できる宿泊施設レストラン、美容院、ナイトクラブ、ガソリンスタンドなどをリストにして紹介するガイドブックで、1967年まで毎年のように発行された。その内容は、時代とともに進化し、旅行を楽しむ余裕が出てきた新しい時代の黒人たちが、差別を受けることなく安心して旅行するために欠かせない情報源となった。

出典: ナショナルジオグラフィック日本版「黒人のためのガイドブック『グリーンブック』はなぜ必要だったか」

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/121000728/>



魅力的な♥  
主人公たちを  
紹介します！

## 映画「グリーンブック」の このキャラクターに注目！

01



### トニー・バレロンガ（愛称:トニー）

- ニューヨーク育ちのイタリア系アメリカ人。無学で、がさつでケンカっ早い。
- だが、妻を愛し、学校で得る知識より社会に出て得る実学重視で世渡りをしてきた。
- ドクター・シャーリーと旅することで、彼本来の優しさから人との違いを素直に受け入れられる様になり、人間的に成長していく過程に注目！

### ドクター・シャーリー(愛称:ドク)

- 高い教育を受け、音楽の才能をもつピアニスト。黒人であることで不当な扱いを受けているが、自分の信条を貫こうと強く生きてきた...
- しかし、黒人コミュニティ、白人コミュニティどちらからも、完全には受け入れられず、常に孤独を感じている。
- ドクがトニーに向かって叫ぶ心からの慟哭と相互に解り合っていく過程に、ぜひご注目を！

02



### ドロレス・バレロンガ（トニーの妻）

- がさつで無学だが気のいい夫を心配しながらも、深く愛する優しい女性。
- 夫トニーとは違い、黒人であるドクに対して差別意識のない温かい対応をしたことが2人の旅が始まるきっかけとなる。
- 旅の途中でトニーが送ってくれる手紙を何よりも楽しみにしている。手紙の内容は旅を重ねる毎に変わっていく...。 さて、その真相とは？

03



あなたの心に最も響いたのはどのキャラクターでしたか？  
お帰りの際にシール●投票で教えてください！



ちよつぴり  
ネタバレ  
あります！

## 誰もがその人らしく生きられる社会を築くために 『グリーンブック』を観て思うこと

### 日常に潜む差別・偏見を見直す

映画の中に、コンサート会場となるホテルのレストランで「コンサート主演者であっても黒人は入場できない。昔からそうだから…」というシーンが描かれています。白人たちは「ドクの演奏は楽しめるが黒人と食事を共にすることはあり得ない。それが、当たり前のことだから」と思っています。

私たちの周りにも「昔からそうだった」という理由だけで差別や偏見が残っている現実が、まだまだあります。古くからのしきたりだから？ それが普通だから？ 差別は仕方がないことなの？

自分たちの身の回りにそんなことは残っていないか、あらためて見直してみませんか。

### 無知は罪なり？

この映画には、奴隷時代の黒人のソウルフードで、差別的な意味合いのあるフライドチキンにまつわる場面が出てきます。奴隷制度が色濃く残る時代、白人はやわらかい胸肉を好み、黒人は油で揚げた骨付き肉を食べることで過酷な労働をしのいでいました。ドクに「特別なディナー」として山盛りのフライドチキンが振る舞われるシーンがありますが、シェフはこのメニューの侮蔑的な意味をわかっていたのでしょうか？

国や文化が違えば物の見方や価値観も変わります。今はインターネット等で簡単に情報が得られる時代です。だからこそ相手のバックグラウンドへの配慮が必要なのではないでしょうか。

### 多様性を受け入れるには？

白人社会では下位の階級とされていたイタリア系白人として、少なからず差別されていたトニー。

そのトニー自身にも人種差別の気持ちがあり、黒人であるドクに雇われることには、複雑な感情がありました。無学で粗野な性格ゆえに言葉が足りないトニー。高い教養と自身が黒人であることへのあきらめが災いして、思いを伝え、行動することをためらってしまうドク。

正反対の二人の間柄は、相手に自分の思いを正直に伝えることによって、徐々に変化していきます。

自分と違う相手を否定するのではなく、違いを認めて受け入れる。そして、自分のことも受け入れてもらう努力をする。このコミュニケーションの積み重ねが、二人の距離を縮めていったのです。

### おわりに

「多様性社会」とは、違った個性や能力を持つ個人が尊重され、誰もが希望を持って自分らしく生きることができ、能力を発揮し参画・活躍できる社会のことを意味します。

この「多様性社会」を実現するための基盤となる理念が「人権の尊重」です。人権は長い時間をかけ人々の苦労と試練の中で確立されました。今や人権は世界共通の理念ですが、人々の人権意識も多様化しています。また、グローバル化や少子高齢化に伴う社会構造の変化、インターネット、スマートフォン、SNS等の普及による生活様式の多様化等を背景とした、新たな人権問題も生じています。

自分と違う価値観を受け止め、コミュニケーションを重ね、互いを分かりあう、それこそが「みんなが尊重される社会」への第一歩につながります。

「すべての人がその人らしく生きられる社会」へと、あなたができることから始めてみませんか？